

ゲーテ的伝統から見るウィトゲンシュタインの「記述」概念
Wittgenstein's Concept of Description and Goethe's Methodological Tradition

木本蒼 (So KIMOTO)
京都大学大学院人間環境学研究科
sokimoto7@yahoo.co.jp

問題提起

『哲学探究』第I部第109節においてウィトゲンシュタインは、自身の考察方法を、科学的「説明 Erklärung」ではなく「記述 Beschreibung」として宣言する。本発表では、ゲーテ思想との比較によって、この「記述」概念の明確化を試みる。

近年、ゲーテ的形態学からの影響を考察したウィトゲンシュタイン研究が盛んに行われている（飯田(2001)、古田(2016, 2020)など）。本発表では、これらの先行文献を参照しつつも、二人の思想家の差異に関する議論において、従来とは異なった仕方でも議論する。

先行研究：ウィトゲンシュタインとゲーテの共通点

まず、両者の共通点を改めて確認する必要がある。高橋(1988)によれば、ゲーテ的形態学には、柱となる二つの概念があり、それは「メタモルフォーゼ」と「原型」である。この二つが働くことによって、それぞれ自然の「多様性」と「単純性」とが可能になる。

ゲーテからウィトゲンシュタインへの影響は、前者の点において見出される。同一の手法によって、自然現象における多様性（ゲーテ）、あるいは、言語現象における多様性（ウィトゲンシュタイン）の洞察が可能となる（古田(2016, 2020)）。

では、両者の相違点はどのように特徴づけられるか。ウィトゲンシュタイン思想には、多様性重視という側面がある。この考え方は、すべての植物や動物に「原型」があるというゲーテの一様化する発想と相容れない。先行研究ではしばしば、この点においてこそ、両者は異なるとされてきた（同上）。

だが、本発表では、このような差異化から距離をとりたい。日常言語は「そのままの状態、秩序だっている in Ordnung sein」と言われるように（『哲学探究』第I部第98節）、ウィトゲンシュタイン的言語観においても、言語の諸現象はたんに多様でバラバラなのではなく、一定の秩序性を有する。本発表では、ゲーテにおける多様性と単純性は、ウィトゲンシュタインにおける多様性と秩序性に、厳密にはではないにしても緩やかに対応していると指摘される。

アレゴリーと象徴

それでは両者の相違は改めてどう特徴づけられるべきか。本発表は迂回路を辿り、詩人としてのゲーテの立場、ならびに「象徴」概念と「アレゴリー」概念にそのヒントを求めたい。

そして、一方でゲーテの文学観ならびに自然科学観は「象徴」に依拠しており、ウィトゲンシュタインの哲学的手法は多分に「アレゴリー」的要素を含んでいるとして、二人の思想家の差異を特徴づける。

ゲーテは「アレゴリー」を軽視し「象徴」を重要視したことで、その後の文学史の流れに多大な影響を及ぼした（ベンヤミン 1999: 下 19 頁）。本発表ではフレッチャー(1978)とベンヤミン(1999)に依拠し、「アレゴリー」を混淆的で継起的な表現形態として特徴づけ、それに対して「象徴」を総合的で瞬間的な表現形態として特徴づける。

「象徴」と「アレゴリー」のどちらにおいても、あるものが、別の何かを意味する（象徴する／^{アレゴリー}寓意である）という点は同じである。だが、一方のゲーテ的な「象徴」においては、(a)一つの理念のもとにほかのすべてが総合されていて、(b)象徴するものと象徴されるものとの指示関係が瞬間的になされる。たとえば、ゲーテの自然科学の議論には、その手法に、単一の原因植物が、他の個々の植物を表すという(a)の関係を見出すことができる。それに対して「アレゴリー」的表現形態においては、(a')特権的な理念のもとに統合されることなく個々の現象が混淆しており、(b')その解釈は時間的な継起のもとで起こる。

ここで注意すべきことは、後者の表現形態は確かに混淆的であるが、だからと言って、バラバラの「アレゴリー」の寄せ集めという無秩序的な叙述方法ではないという点である。ベンヤミン(1999)は、「アレゴリー」的表現形態をモザイク画になぞらえ、絵を構成する個々の要素が輝けば輝くほど、全体としての絵も美しくなると述べる。本発表では、ここに「アレゴリー」的表現形態が有する、全体としての秩序性の可能性が示唆されていると解釈する。

本発表の結論：ウィトゲンシュタインとゲーテの相違点

以上の「象徴」概念と「アレゴリー」概念の対照的な特徴づけによって、ゲーテの形態学とウィトゲンシュタインの記述的方法論との相違がより一層浮き彫りになる。

多様にメタモルフォーゼしていく現象に対して、前者では、著者にして詩人であるゲーテ自身の総合的直観によって一つの「象徴」へとまとめ上げられるのに対して、後者では、作者による単純性への統合は行われぬ。『哲学探究』における言語現象のさまざまな「記述」は、一見すると混淆的であるが——ちょうど多様な要素の寄せ集めが、鑑賞者の視線のもとで一つのモザイク画へとまとめ上げられていくように——この哲学書を読む読者の時間的継起のうち一定の秩序性が看取されることになるのである。

主要参考文献

荒畑靖宏, 山田圭一, 古田徹也(2016), 『これからのウィトゲンシュタイン—刷新と応用のための14篇』, リベルタス出版.

飯田隆(2001), 「ウィトゲンシュタインとゲーテ的伝統」, 『モルフォロギア: ゲーテと自然科学』.

ウィトゲンシュタイン(2013), 『哲学探究』, 岩波書店.

- ゲーテ(2009), 『ゲーテ形態学論集・植物篇』, 筑摩書房.
- 高橋義人(1988), 『形態と象徴』, 岩波書店.
- 古田徹也(2020), 『はじめてのワイトゲンシュタイン』, NHK 出版.
- フレッチャー(1978), 「文学史におけるアレゴリー」, 『アレゴリー・シンボル・メタファー』, 平凡社.
- ベンヤミン(1999), 『ドイツ悲劇の根源 (上・下)』, 筑摩書房.